

梵文『法華経』に見られる動詞 *bhū* の中動態語形

仙台高等専門学校

笠松 直

要 旨

動詞 *bhū* は本来、能動態で活用する動詞である。RV 以来、ほとんど例外はない。しかし Saddhp の韻文部分には 3 sg. ind. *bhavate*, 3 sg. opt. *bhaveta* などいくつかの中動態語形が存する。こうした中動態語形は同時代の文献である Mahāvastu にも稀にしか見られない。このような異例とも言える中動態語形はなぜ、どのように用いられたものであろうか。

結論的には、多数存する *bhaveta* は BHS *bhaveya* を、韻律を崩すことなくサンスクリット語形とするため採用された詩的自由形 (*poetic license*) である。中央アジア伝本の散文には一部 BHS *bhaveya* が残存している。これが本来の語形であろう。韻文中の語形は早期に *bhaveta* と置換されたと思しく、多くの写本で読みは比較的揃う。しかし新層のネパール伝本の一部では *bhaveta* を一韻律に反してまでも *bhavet* と校訂する傾向が看取される。異例な語形であるとの認識があったものであろう。*bhavate* も、韻文ウパニシャッドに見られるそれと同様、韻律上の破格と解釈できる。

2 sg. ipv. *bhavasva* は原 Saddhp に遡るとはいえない。2 pl. ipv. *bhavadvvam* とともに、ギルギット・ネパール祖型段階に遡る語形と見える。その使用意図は、何らか主語の関心を表現した可能性があるが、二次的な読みと言わざるを得ない。本来の読みは中央アジア伝本に証される BHS *bhavatha* ないし Skt. *bhavata* の如くであろう。

そもそも中動態の語形は少数で出典箇所も偏り、その活用は生産的でない。総じて原 Saddhp では、*bhū* は能動態で活用形を展開したと思しい。仮に中動態の語形が用いられていたとしても、元来中動態が持っていた機能は失われていたと思われる。

Key words: *bhū*, *bhavate*, *bhaveta*, *bhaveya*, 仏教混淆梵語文献, 『法華経』

1. 序

仏教混淆梵語 (Buddhist Hybrid Sanskrit) は、古典サンスクリット語と中期インド語とが混淆したかのような特徴を示す、北インド所伝の仏教經典に用いられる言語である。北インドの仏教徒たちは当初、ある種の中期インド語方言を用いていたようである。しかし古典サンスクリット語文献群が展開するのに応じ、自派の文献を必要の限り手直ししていったものと思しい。BHS 文献に語彙や音韻・文法の点でしばしば中期インド語的な現象が残存するの

はこうした事情によるものであろう。

初期大乘経典『法華経 *Saddharma-puṇḍarīka-sūtra*』(Saddhp)も BHS 文献の一つに数えられる。『法華経』、特に鳩摩羅什による漢訳『妙法蓮華経』は古来広く依用され、その研究の蓄積はまさしく汗牛充棟というにふさわしい¹⁾。その原形に近づき、知りたく思うゆえであらう。Kern-Nanjio の校訂本 (KN) の出版以来、原典である Saddhp の研究も盛んに行われてきた²⁾。いまなお我々を鼓舞するその思想の原像を探求することは、法華信仰者ならずとも心惹かれる仕事であらう。

2. 問題の所在

梵文『法華経』の形成は1～2世紀ころと推定される。原型は中期インド語的な環境下に形成されたものと思われる。動詞は中期インド語の通例にならって能動態で活用するのが基調であって、中動態語形の使用は限定的であったものであろう³⁾。現在我々が手にする写本系統群、すなわち中央アジア・ギルギット・ネパール等に伝承された写本群は、古期のものであればあるほど中動態語形の用例が少ない傾向とみえる。

諸系統の共通祖型というべき段階でも、なお中期インド語的な属性は濃厚であったと思われる。現行の校訂本 (KN および WT 本) や現存の諸写本の、特に韻文部分に見られる諸語形は経典古層の言語のよすがを伝えるものであろう。一方、散文部分には多数の中動態語形が

¹⁾ 最近、先行研究を網羅した望月文献表が公表された (2020年→参考文献)。今後の研究に多大な便宜をもたらすものである。これに対する書評は: 石田 (2021)。

²⁾ KN に批判校訂を加えた荻原・土田本 (WT) も広く用いられる。以下、本稿で主に参照するテキストは: Gilgit 本 (Watanabe 校訂本に従う; 7世紀以降の書写とされる); Kern-Nanjio 校訂本; Cambridge 蔵本 (C5 と称される; 書写年代西暦1064/1065年); 大英図書館蔵本 (B と称される; 書写年代11-13世紀); Kolkata 本 (A1 と称される; 書写年代西暦1680/1681年); 東大蔵本 (T8 と称される; 書写年代17-18世紀)。中央アジア伝本は Kashgar 本 (戸田校訂本に従う; 9-10世紀の書写とされる) で代表するが、必要に応じて Farhād Bēg 本などを参照する。

³⁾ 動詞 *bhāṣ* 「話す」の状況を例示する。この動詞は正規の文法では中動態で活用する。例えば: KN V: 124.2-3 *evam eva kāśyapa tathāgato 'rhan samyakṣambuddho yaṃ dharmam bhāṣate sarvaḥ* ¹²⁾ *sa dharmā ekarasaḥ* 「まさしく同様に Kāśyapa よ、如来・阿羅漢・正等覚者が、もし法を話すのであれば、その法はすべて一味である」 (=WT 116,10-12)。このように Saddhp の校訂本は散文部分では中動態を採る。しかし校訂本は、韻文中では能動態で読む: Saddhp I 60a *dharmam ca so bhāṣati lokanātho* 「そしてかの世界守護者は法を話す (KN 23,9=WT 21,5~Kashg 31a4 *dharmam ca so bhāṣati lokanāyako*)。おそらくこれは、原 Saddhp では韻文・散文を通じて能動態を採っていたが、散文部分の語形が後代の改変を被ったものであろう。中央アジア・Kashgar 写本では散文部分でも通例、能動態を採る。例えば先の KN V: 124.2 の並行箇所: Kashg 125a7 ... *yat ki[m]cid dharmam bhāṣati*。

なお KN V: 137,6-7 *tena śrāva-*¹⁷⁾*kayanīya evaṃ jānāty evaṃ ca vācam bhāṣate* 「このため声聞道の者はこのように認識し、またこのように言葉を話す (=WT 127,2-3)」の並行 Kashg 136b4 は... *evaṃ vācam bhāṣate* と読む。この箇所は漢訳『妙法蓮華経』に訳出されていない、後代に補われた箇所である。ここで Kashgar 本が *bhāṣ* の正規語形 *bhāṣate* を示して先の Kashg 125a7 *bhāṣati* と対立することは、文献の層序を言語的な証拠で示すものと評価できる。活用形の差によって層序を確認することについては笠松 (2019a) を参照されたい。

伝わる。

しかし本稿で課題とする *bhū* については、その中動態語形の出現箇所は韻文部分に集中する(→4.)。この事実は多少の興味を呼ぶ。一般に Saddhp 韻文部分は中期インド語の特徴を濃厚に保つ。正規の(ないしヴェーダ期の)サンスクリットで中動態の活用をとる動詞であっても能動態の活用形を示すのが通例であるのに(→n.3), なぜ *bhū* については、そもそも能動態で活用する動詞であるにも関わらず、この関係が逆転するのか。このような特色的な中動態語形は果たして真正のものであったか否か。Saddhp の撰述者はその思想を述べ伝えるに際し、詩人が韻律の制約のもと詩的自由形を行使できるのと同様に、思想上、特段の意味を持たせようと、いわば「哲学的自由形」を用いたものであったものか否か。検討する価値はあろう。

結論的には筆者は、Saddhp の原形形成期に *bhū* の中動態は機能しておらず、中動態語形が求められたのは韻律的な要因による後代のテキスト「校訂」「校正」の必要によるもの、すなわち詩的自由形にとどまると考えている。以下、例示・検討する。

3. 標準的な語法の確認: ヴェーダ文献の用例

動詞 *bhū* は Ṛg-Veda 以来、極少数の異例形を除けば、一貫して能動態で活用する動詞である⁴⁾。例えば: RV III 5,4a *mitrō agnīr bhavati yāt sāmiddhah* 「アグニは、点火された場合には、ミトラとなる」; ChUp VII 15,4 *prāṇo hy evaitāni sarvāni bhavati / sa vā eṣa evaṃ paśyann evaṃ manvāna evaṃ vijānann ativādī bhavati* / 「他ならぬプラーナがこれら一切のものたちを支配するからだ。この際、ひとがこのように観察し、このように考察し、このように識別するなら、雄弁な者 (*ativādin-*) となる」。以下、本動詞としての *bhū* はもっぱら能動態で活用する。

韻文ウパニシャッドに見られる *bhavate* の語形は Triṣṭubh の break を担う「短・短・長」の音節を得るための語形と理解される: ŚvetUp II 14cd *tadvātmatattvaṃ prasamīkṣya dehī ekaḥ krtārtho bhavate vītaśokaḥ // 14 //* 「そのようにアートマンの真相をはっきりと認めた後には、肉体に限定されている (*dehin-*[*ātman-*]) は独り目的を達して、憂いを離れた者となる」。またさらに MuṇḍUp III 1,4ab *prāṇo hy eṣa yaḥ sarvabhūtair vibhāti vijānan vidvān bhavate nātivādī /* 「一切の存在者たちを通じて輝きかけている、これがプラーナなのだ。[この者を] 識別すれば、知者はならない、雄弁な者 (*ativādin-*) とは」。特に後者については述語に *ativādin-* をとる点、先に引用した ChUp の下線部の例を参照されたい。この *bhavate* は韻律に強いられた m.c. 語形に過ぎないであろう。

⁴⁾ *bhū* の活用については Gotō (1987: 229f.) を参照。Veda 文献における中動態の異例形についてはその n.492 に、本節に扱うものも含め列挙・説明される。また *bhavate* (→ 4.1.) に関しては特に Gotō (2000) および後藤 (2017) を参照。

韻文ウパニシャッドの用例であれば、以下の *Kaṭhop* の例も参照したい。正規のサンスクリット語形 *bhavati* では韻律に合わないが、中期インド語的に *bhoti* と読むことで *Śloka* が得られる: *Kaṭhop VI 11 tām yogam iti manyante sthirām indriyadhāraṇām / apramattas tadā bhavati yogo hi prabhavāpyayau // 11 //* 「それを *yoga* であると [人々は] 思っている、しっかりとした感覚諸器官の保持を。その時には、人は不放逸な者となる。何故なら、*yoga* は発生と帰滅とであるから」。下線部は、表記通りであれば9音節を数える。しかし *bhavati* を /*bhoti*/ と読むことでこの難点は解消される。これは中期インド語的な現象であり、以下の *Saddhp* や *Mahāvastu* にも類例を見ることができる。

4. *Saddhp*での状況概要

無論のこと *Saddhp* でも通例、*bhū* は能動態で活用する。WT 本に対する索引によれば3人称単数・能動態 *bhavati* は65例（うち韻文10例⁵⁾・散文55例）、3人称複数・能動態 *bhavanti* は62例（うち韻文37例・散文25例）存する。これに対して3人称単数・中動態 *bhavate* は韻文中に5例見られるのみで、3人称複数・中動態の *bhavante* は韻文にも散文にも見られない。直説法ということであれば、未来語幹の3人称単数・能動態の *bhaviṣyati* は計144例（韻文22例・散文122例。加えて *bhaviṣyati* が韻文にのみ3例）存する一方、中動態の *bhaviṣyate* は8例に過ぎず、またすべて韻文中の用例である。以上述べた直説法の状況を能動態（左半分）と中動態（右半分）とに対比して示せば以下の如くである。

table 1 能動態・中動態の用例数の差の例示

	<i>bhavati</i>	<i>bhavanti</i>	<i>bhaviṣyati</i>	<i>bhavate</i>	<i>bhavante</i>	<i>bhaviṣyate</i>
metric	10	22	22	5	0	8
prose	55	122	122	0	0	0

希求法については、BHS 語形の3人称単数 *bhavi* が韻文にのみ15例、同様に3人称単数の *bhaveya* (4例) および *bhaveyā* (3例) があわせて計7例存し、いずれも韻文中の用例である。正規の古典サンスクリット語形の3人称単数・能動態の *bhavet* は最も広範にみられ、計102例（うち韻文38例・散文64例）存する。正規の語形が用例多く、分布が広いのは自然なことである。中動態については、3人称単数 *bhaveta* が韻文部分にのみ22例存する。

⁵⁾ 加えて *bhavati* が韻文中にのみ4例存する。すべて m.c. と解し得る。この件については後述 (→ 4.1.1)。

table 2 希求法語形の分布

	<i>bhavi</i>	<i>bhaveya / bhaveyā</i>	<i>bhavet</i>	<i>bhaveta</i>
metric	15	7	38	22
prose	0	0	64	0

3人称複数であれば能動態 *bhaveyur* が計25例（韻文3例 [加えて韻文部分に、語末の *-r* を欠いた語形 *bhaveyu* が8例現れる⁶⁾・散文22例）存するものの、中動態として期待される *bhaveran* は用例を見ない。

命令法については2人称単数・能動態 *bhava* が25例（うち韻文12例・散文13例）。正規の語形はやはり用例数が多く、分布範囲も広い。2人称複数の BHS 語形 *bhavatha* ないし *bhavathā* が韻文にのみ3例というのは尤もなことである。2人称単数・中動態の *bhavasva* は韻文にのみ2例。2人称複数・中動態の *bhavadhvam* は韻文中に2例・散文中に2例見られる。こうした状況を図表に示せば以下の如くである。

table 3 命令法語形の分布

	<i>bhava</i>	<i>bhavatha / bhavathā</i> ⁷⁾	<i>bhavasva</i>	<i>bhavadhvam</i>
metric	12	3	2	2
prose	13	0	0	2

総じて言えば、およそ中動態の語形は韻文部分に限られる特殊な語法といえる。散文部分に中動態語形が現れる例は皆無ではないが、*bhavadhvam* の2例のみに限られる（→4.4.）。この特徴的な現象は既にそれ自体、物語るところがあろう。おそらく *bhū* の中動態語形は韻律に規定されてこそ現れるものであり、従って現実には機能しなかったものであろう。

以下、韻文部分に現れる中動態語形を中心にいくつかの語形について解釈を試みる。

4.1. *bhavate*

WT 本索引によれば *bhavate*⁸⁾ は5例存し、うち3例で KN / WT 本とカシュガル写本と読みが一致する（III 13a・XVIII 51b・XVIII 61a 並行箇所）。KN / WT 本に見る限り、全用例で *break* の短音2つと *cadence* の冒頭1つの長音を担う位置にあることが共通する。

⁶⁾ この語形については Edgerton の BHS §26,19 を参照。用例多く、普通の語形である。

⁷⁾ ここでは *bhavatha* WT I: 24,2; VII: 173,24 のほか *bhavathā* WT I: 27,4 を含めた。

⁸⁾ このような語形に見られる語尾の *te*（さらに2人称の *se*）は m.c. によるかと、*bhavate* を例示しつつ既に Edgerton が述べている（Edgerton 1946:203）。彼は能動態・中動態のような形態論的な要素も寄与するであろうと述べるが、とりわけ *bhū* については疑わしい。*bhū* の中動態は本来存在しないからである。

table 4 KN/WT *bhavate* とその異読

III 13a	KN 63,1 = WT 62,4 = Kashg 67b7 <i>bhavate</i> ⁹⁾
XVII 15a	KN 353,1 = WT 298,15 <i>bhavate</i> ¹⁰⁾ ⇔ Kashg XVIII: 340a4 <i>bhave</i> (d)
XVII 17c	KN 353,6 = WT 299,1 = <i>bhavate</i> ⇔ Kashg XVIII: 340b1 <i>bhava[n]ṭi</i> ¹¹⁾
XVIII 51b	KN 366,3 = WT 310,21 = Kashg XIX: 352a4 <i>bhavate</i> ¹²⁾
XVIII 61a	KN 370,9 = WT 314,9 = Kashg XIX: 357a7 <i>bhavate</i> ¹³⁾

Saddhp III 13a および XVIII 51b の例を確認する: Saddhp III 13a *yadā tu buddho bhavate 'gra-sattvaḥ* 「他方, もし [ひとが] 衆生の頂点たるブツダになる場合には (KN 63,1=WT 62,4~Kashg 67b7 *yadā tu buddho bhavate 'gra-sattvaḥ*); Saddhp XVIII 51b *na ca tāva divyaṃ bhavate 'sya ghrāṇam* / 「そして彼の嗅覚はまだ天に属するものではない (KN 366,3=WT 310,21~Kashg 352a3-4 *na ca tāva di-¹⁴⁾vyam bhavate 'sya ghrāṇam*)」。これら2用例ではテキストはよく一致しており, この2句はそのまま三写本系統の共通祖型段階に遡ると信じることができる。

さてサンディにいささか疑問が残る例が存する。上掲の2例のように *e* に引き続く語頭の *a°* が脱落するのは正規の文法に適うが, 以下に見るように *a°* が脱落するのは理解がたい。例えば: Saddhp XVIII 61a *parisuddha tasya* [WT *tasyo*] *bhavate 'tmabhāvo* 「彼には極清浄な身体が生じる (KN 370,10~WT 314,9~Kashg XIX 357a6-7 *pari-¹⁷⁾śuddha tasya bhavate 'tmabhāvo*)」。

写本間の対応はこの *ātmabhāva*-「身体」の語を巡って多少揺れる: Saddhp XVII 15a *sugauru tasya* [WT *tasyo*] *bhavate 'tmabhāvaḥ* 「彼にはとても素晴らしい身体が生じる (KN 353,1~WT 298,15~Kashg XVIII: 340a4 *ara(...)* *tasya bhaved*(d ā)*tmabhāvaḥ*)」。このようにカシュガル写本には *bhave*(d) とあり, 能動態・希求法で読む。この *bhavet* の読みはさらに Gilgit 写本に支持される¹⁴⁾。

⁹⁾ KN 63,1 *bhavate*=WT 62,1=Gilg B: 204,11=Cambridge 20a4=Kolkata 29a5=東大蔵 18a2=Kashg 67b7; 大英図書館蔵 26b3 *bha[ga]vate*。大英図書館蔵本の読みは *bhagavate* 「世尊」との誤記が紛れ込んだものであろう。

¹⁰⁾ KN 353,1 *bhavate*=WT 298,15=Cambridge 115b2=大英図書館蔵127a1=Kolkata 157a6。これに対して東大蔵 89b3 は *bhavat' ātmabhāvo* と読み, *bhavati* の語末の *i* が落ちたとの理解。他本の支持がなく, 独自の合理化の疑いが残るが, 下注13の Gilg B: 272,29 *bhavat' ā°* を参照すれば捨てがたい。Gilg A: 132,21 *bhaved ātmabhāvaḥ* の読みは Kashg 340a4 *bhave*(d ā)*tmabhāvaḥ* と等しい。古層の2写本が一致することは, この *bhavet* の読みの信頼性を増す。ただし Gilg B: 264,11 *bhavatv ātmabhāvo*。

¹¹⁾ KN 353,6 *bhavate*=WT 299,1=Cambridge 115b3=大英図書館蔵 127a2-3=東大蔵 89b4~Kolkata 158a1 *labhate* ⇔ Kashg XVIII: 340b1 *bhava[n]ṭi*。カシュガル写本のみ能動態の読みを示す。

¹²⁾ KN 366,3 *bhavate 'sya*=WT 310,21=Cambridge 119b1=大英図書館蔵 131b4=Kolkata 163a5=Kashg 352a4 ⇔ 東大蔵 92a8 *bhavite 'sya* ⇔ Gilg A: 140,21 *bhavati sya*。

¹³⁾ KN 370,9 *bhavate 'tmabhāvo*=WT 314,9=Cambridge 121a3=大英図書館蔵 133b4=Kolkata 165b2=Kashg 357a7; Gilg A: 142,34 *bhaved ātmabhāvo*; Gilg B: 272,29 *bhavat' ātmabhāvo*。この件, 前注9を参照。Gilg A は *bhaved* の読みで共通する。東大蔵本はこの箇所欠落。

¹⁴⁾ もし Kashg XVIII: 340a4 *bhave*(d ā)=Gilg A: 132,21 *bhaved ā°* さらに Gilg A: 142,34 *bhaved ā°* の読みを重視するならば, 本来は BHS 語形の **bhavi* が break の短音2つを担った可能性も排除できない。この語形であれば break の短音2つを *bhavi* が, cadence を *ātmabhāvaḥ* が担うことで (*bhaviy* と, または hiatus で読む必要はあるものの) 韻律的におさまりがよい。

ところで Gilg B:272,29 *bhavat' ātmabhāvo* と 東大蔵 89b3 *bhavat' ātmabhāvo* とは写本系統と時代の差を超えて一致した読みを示す。これは **bhavati ātmabhāvo* が母音脱落を起こして break の短音節2つを確保した形であるかもしれない。この見解については ŚvetUp I 3d, IV 11a, V2a, V4d に見られる, Triṣṭubhのcadence 部分 (_ _ x) を担う °*tiṣṭhaty ekaḥ* の読みを参照したい (→Gotō 2000ないし後藤2017の 5.1.1節)。°*ti* が °*ty* となるサンディを経ず, 母音脱落によって °*tiṣṭhat' ekaḥ* となったと解される。おそらくこの案が文法的・韻律的に最も無理が少ない。

複合語 *ātmabhāva-* はやや哲学的な概念と見える。この語が特に何らかの思想上の必要から中動態を要した可能性を考慮する余地はあるかもしれない。しかし以下に見る Mahāvastu の用例を見る限り否定的と言うべきであろう: Mv II: 382,2^m *tasyāpi bhoti śubho* [Ed. MARCINIAK *śubha*] *ātmabhāvo* 「彼にも麗しい身体 (*ātmabhāva-*) が生じる (~Ed. MARCINIAK 458,4)」。麗しい (*śubha-*) ことと非常に清浄 (*pariśuddha-*) であることとの対立が意図されている可能性は排除しきれないにせよ, *ātmabhāva-* の動詞は能動態 *bhavati* (*bhoti*) がより普通と見える: Saddhp III 120c *dīrghātmabhāvā hi bhavanti prāṇino* 「[彼等は] 長い身体を持つ生き物たちとなるのだ」(KN 95,2=WT 90,6=Kashg 98b4 *dīrghātmabhāvā hi bhavaṃti prāṇino*)。能動態と中動態の語義的な対立は用例上, 見出しがたいというべきであろう。

また Kashg XVIII: 340b1 *+bhavati* (~KN XVII: 353,6 *bhavate*) は, これが韻律に強いられた語形であることを示唆しよう。ならば *bhavate* も同様であるかもしれない。

4.1.1. *bhavate* と *bhavati*

ここで *bhavate* と *bhavati* との並行関係を数例, 観察する。

Saddhp XVII 17c *śakr'āsanānām bhavate sa lābhī* 「彼はシャクラ [神たち] の座たちの獲得者となる (KN 353,6=WT 299,1)。このカシュガル写本並行は *+bhavati* と読む: Kashg XVIII: 340b1 *śakrāsanānām bhava[n]tī sa lābhī*」。この偈に対応する散文部分の読みは, 未来語幹ではあるが *bhaviṣyati* と能動態で読む: KN XVII: 349,14-350,1 *tena sa puṇyābhisaṃskāreṇa lābhī bhaviṣyati śakrāsanānām brahmāsanānām cakravartisiṃhāsanānām* 「その福德の集積によって彼はシャクラ神たちの座たちの, 梵天たちの座たちの, 転輪聖王たちの座たちの獲得者となるであろう (=WT 295,17-19)」。すなわち中動態は特段の意味を担っておらず, 韻文中の語形は単に m.c. である可能性がある。

ところで KN / WT 本にも *bhavati* が4例存する。すなわち Saddhp III 125b; X 34a; XIII 41d; XIII 64a である。

このうち Saddhp III 125b *adātu-kāmo bhavati sa teṣām* 「彼は彼等に [多くを] 与えようとは欲しない (KN 95,11=WT 91,3)」についてはカシュガル写本の並行は取れない。しかし他の3例で KN / WT *bhavati* ⇔ Kashg *bhavate* の対立が見られる。すなわち: Saddhp X 34a *pratibhānu tasyā bhavati asaṅgam* 「彼の雄弁は妨げられることがない者となる (KN 238,1 =WT 205,150 ⇔ Kashg 226a2 *pratibhāna tasya bhavate asaṅgam*); XIII 41d *na tasya khedo bhavati kadācit* 「彼に労苦は

まったくない (KN 287,4=WT 205,15 ⇔ Kashg XIV: 273b1 *na tasya khedaṃ bhavate kadācit*); XIII 64a *so ca prahr̥ṣṭo bhavati śrunitvā* 「そして彼は [法を] 聞くと歓喜した者となる (KN 294,7=WT 251,11 ⇔ Kashg XIV: 281b5 *sa ca prahr̥ṣṭo bhavate śrunitvā*)」。

以上3例では Kashg *bhavate* は WT / KN *bhavati* で対応している。この対応は 4.1.節で見た例とちょうど逆転している。たしかに *bhavate* の読みは写本間でしばしば一致し、共通祖型段階に遡る可能性は否定できない。しかしこの「校訂」作業は、仮にあったとしても貫徹されたものとはいえない。

4.2. *bhaviṣyate*

WT 本によれば未来形の *bhaviṣyate* は8例存する。対応を表にして示せば以下の通り。

table 5 KN/WT *bhaviṣyate* とその異読

I 82d	WT 24,13 <i>bhaviṣyate</i>	⇔ KN 26,4 <i>bhaviṣyatha</i> ¹⁵⁾ ~ Kashg 33b5 <i>bhaviṣyathā</i>
II 131a	KN 57,7 = WT 56,5 <i>bhaviṣyate</i> ¹⁶⁾	⇔ Kashg 62b4 <i>bhaviṣyant'</i>
III 29b	KN 68,9 = WT 66,23 = Kashg 73a6 <i>bhaviṣyate</i> ¹⁷⁾	
VI 3d	KN 145,12 = WT 132,14 <i>bhaviṣyate</i> ¹⁸⁾	⇔ Kashg 142a4 <i>bhaviṣyati</i>
VI 17d	KN 149,6 = WT 135,7 = Kashg 142a4 <i>bhaviṣyate</i> ¹⁹⁾	
VI 19d	KN 149,10 = WT 135,15 = Kashg 145a7 <i>bhaviṣyate</i> ²⁰⁾	
VI 34c	KN 154,14 = WT 139,18 = Kashg 149b3 <i>bhaviṣyate</i> ²¹⁾	
VIII 28a	KN 208,8 = WT 184,5 <i>bhaviṣyate</i> ²²⁾	(cf. Kashg 198a4 <i>sthāsyati</i>)

8例のうち6例は文頭に位置し、古典期の *Triṣṭubh* の一類型である *Upendravajrā* の opening の最初の4音節 (_ _ _) を供給するものと見える (Saddhp I 82d, III 29b, VI 3d, VI 17d, VI 19d, VI 34c)。例えば: Saddhp I 82cd *mā bhāyathā bhikṣava nirvṛte mayi bhaviṣyate buddha mamottareṇa* 「比

¹⁵⁾ WT 24,13 *bhaviṣyate* = Gilg A: 17,29 = Cambridge 9b5 = 大英図書館蔵12a5 = Kolkata 12b5 = 東大蔵8b5。KN 26,4 *bhaviṣyatha* については脚注に O. *thā*, the rest *te* とあり、Kashgar 本にのみ伝わる読みを参照したものと知れる: Kashg 33b4-5 *bhaviṣyathā buddha mamāntareṇa* 「[君たちは] 私の後にブッダとなるであろう」。

¹⁶⁾ KN 57,7 *bhaviṣyate* = WT 56,5 = Gilg B: 199,16 = Cambridge 18b1 = 大英図書館蔵24b2 = Kolkata 26b6 = 東大蔵16b5。Kashg 62a4 *bhaviṣyant'* は孤立。

¹⁷⁾ KN 68,9 *bhaviṣyate* = WT 66,23 = Gilg B: 207,28 = Cambridge 22a2 = 大英図書館蔵29b5 = Kolkata 31b6 = 東大蔵19b1 = Kashg 31b6。

¹⁸⁾ KN 145,2 *bhaviṣyate* = WT 132,14 = Gilg A: 68,1 = Cambridge 46a2 = 大英図書館蔵59a4 = Kolkata 65a6 = 東大蔵38a5。対応する Kashg 142a4 *bhaviṣyati* の事情については上掲本文を参照。

¹⁹⁾ KN 149,6 *bhaviṣyate* = WT 135,7 = Gilg A: 69,23 = Cambridge 47a3 = 大英図書館蔵60b1 = Kolkata 66b5 = 東大蔵39a1 = Kashg 145a4。

²⁰⁾ KN 149,10 *bhaviṣyate* = WT 135,15 = Gilg A: 69,31 = Cambridge 47a4 = 大英図書館蔵60b2 = Kolkata 66b7 = 東大蔵39a2 = Kashg 145a7。

²¹⁾ KN 154,14 *bhaviṣyate* = WT 139,18 = Gilg A: 72,27 = Cambridge 49a3 = 大英図書館蔵62b2 = Kolkata 69a4 = 東大蔵40a6 = Kashg 149b3。

²²⁾ KN 208,8 *bhaviṣyate* = WT 184,5 = 大英図書館蔵84b2 = Kolkata 94a1 = 東大蔵54a4。Cambridge 68a5 *bhavi(sya)te* もこれに等しい。

丘たちよ、私の涅槃に際して、恐れるな²³⁾。私の後に [他の] ブッダが生じるであろう (WT 24,12-13)」。この句に対して WT は「版本には *bhaviṣyatha* とあるも、意味通ぜず、且つ *tha* は *metre* は長を要す。K'. に *bhaviṣyate* (fut. 3. sg.) とあり、意味通じ *metre* に合するを以て之を採る」と脚注に述べる。この KN *bhaviṣyatha* の読みはカシュガル写本の読み準じたものである (→ n.15)。WT はこれをネパール所伝の読みへと再校正したことになる。写本伝承史上、幾度か起こったであろう読みの合理化ないし校正作業の現場はこのようなものであっただろう。

さらにまた: Saddhp VI 3d *bhaviṣyate apratimo maharṣiḥ* 「彼は比類なき大聖仙となるであろう (KN 145,12=WT 132,14)」。この読みは Gilgit A: 68,1 *bhaviṣyate apratimo maharṣiḥ* などに支持されるが、Kashg 142a4 *bhaviṣyati apratimo maharṣi* は能動態語形で対応し、韻律は破格となる。こうした読みの違いは何に由来するものであろうか。

ここで Saddhp VIII 31ab (KN 209,3=WT 184,17-18) とそのカシュガル写本との並行関係に注意すれば: *sarveṣam etādṛśakaṃ bhaviṣyati nāmaṃ tadā loki sadevakasmin* / 「[五百弟子の成仏後には] 全ての者たちにこれに等しい名が、その時、神々をふくむ世界において生じるであろう (*bhaviṣyati*)」。これに対して Kashg 199a1-2 *sarveṣa etādṛśa nā(ma)dheyam bhavi-^{l2}syate lokavināyakānām* ... 「全ての者たちに、これに等しい名称が生じるであろう (*bhaviṣyate*)、世界の指導者たちに」。つまり *bhaviṣyati* と *bhaviṣyate* とはともに 4 音節であり、Jagatī の cadence (_ _ _ x) の後ろ 4 音節に適合的である。しかし後者は (_ _ _ _) のような opening 冒頭にそのまま用いることができるが、前者の使用に際しては人称語尾 *ṭi* の後に子音連続を配置して韻律上の「長」とする必要がある。カシュガル写本の *+nāmadheyam* は Triṣṭubh の cadence (_ _ _ x) 向きの音節構造といえるが、KN=WT の *nāmaṃ tadā* は (_ _ _ _) のような opening 冒頭に向くといえる。すなわちカシュガル写本の *nā(ma)dheyam bhaviṣyate* と KN=WT の *bhaviṣyati nāmaṃ tadā* と、いずれの語形・語順を採るかは韻律上の位置で選好されたと解することが可能である。

またさらに以下の例を参照したい: Saddhp VIII 28d *duḥkhitā bhaviṣyanti narā marū ca* // 「人間たちも神々も、苦痛に陥ることとなる (KN 208,9=WT 184,8)」。この *bhaviṣyanti* は、文法的には好ましいが、韻律的に異例である (break がなく、計12音節となる)。もし原型を BHS *bheṣyanti* と想定すれば11音節の Triṣṭubh として理解できる。あるいは並行箇所のカshg 198b5 *narā marū duḥkhitakā bhavanti* の Upendravajrā (_ _ _ _ , _ / _ _ _ x //) でも韻律的に好ましい。これは韻律の破格か文法の破格か、何れを選ぶかという課題と見ることができよう。

4.3. *bhavasva*

bhavasva は 2 人称単数・中動態の命令法の語形である。WT 本索引によれば 2 例存する。ギルギット・ネパール諸写本は共通して *bhavasva* と読んでおり、写本の支持は厚い。両写

²³⁾ 「...恐れるのを止めよ」の停止命令の可能性もあるが、ここでは禁止の意味に理解した。Saddhp における禁止法の構文については Kasamatsu (2022) を参照されたい。

本系統の共通祖形を *bhavasva と想定するのは自然である。

2用例はともに Triṣṭubh の cadence 末尾の3音節を担う。用例は以下の通り: Saddhp III 32b *prahrṣṭa tvam śārisutā bhavasva* / 「君は, Śārisuta よ, 慶んだ者となれ (WT 67,9=KN 69,3)」; Saddhp XII 2a *alpotsukas tvam bhagavan bhavasva* 「君は, 世尊よ, 懸念少なき者となれ (WT 232,9=KN 271,7)」。

古くパーリ語 *bhavassu* (< *bhavasva) が存在しており, Saddhp における *bhavasva* の読みはこれを引き継ぐ確実なものに見える。しかし管見の限り, *bhavassu* の用例はパーリ文献古層の韻文部分ないし文法書の記載に限られる²⁴⁾。特に韻文に用いる雅語として後代に伝承された可能性も皆無とは言えないが, この語形は Mahāvastu に用例がなく, やや疑問が残る。

これにカシュガル写本は能動態の *bhohi* または *bhavāhi* で対応する。従って *bhavasva* を三系統の写本群の共通祖型段階に遡ると想定するには無理がある。

table 6 KN/WT *bhavasva* とその異読

III 32b	KN 69,3 = WT 67,9 <i>bhavasva</i> ²⁵⁾	⇔ Kashg 73b3 <i>bhohi</i>
XII 2a	KN 271,7 = WT 232,9 <i>bhavasva</i> ²⁶⁾	⇔ Kashg 149b3 <i>bhavāhi</i>

bhohi は中期インド語的な語幹 *bho-*^{ti} による命令法である。*bhavāhi* は, 語尾 *-hi* を付する athematic 語幹の (例えば *jānāhi* のような) 命令法に倣って作られた中期インド語的な語形と判断できる。いずれも Mahāvastu の韻文・散文に用例があり, 自然な語法といえる (→ 6.)。

上掲2用例のカシュガル写本並行箇所は以下の如し: Kashg III: 73b3-4 *prahrṣṭa bhohi tvaya śāripu⁴tra* 「慶んだ者となれ, 君は, Śāriputra よ」²⁷⁾; Kashg XIII: 261a4-5 *alpo(tsu)ko bhagavan bhavāhi a⁵tra* 「世尊よ, 懸念少なき者となれ, この際」。KN / WT 本と文意は等しいが, 語順を違える。*bhavāhi* の用例数として必ずしも圧倒的ではないが, 原 Saddhp 段階では Mahāvastu と同様, *bhohi* / *bhavāhi* がより普通の読みであったと理解したい。

²⁴⁾ *bhavassu* の用例は, Jātaka を例にとれば Jā IV: 273,13; VI: 299,29 の2例のみ, 何れも韻文。パーリ聖典を通じて韻文部分のみの語法である。*bhavāhi* であれば Jā VI: 309,30; 317,22; 321,12 の3例の何れも韻文。しかし *bhavāhi* は散文部分にも用例を見出すことができ, やや使用範囲は広い。例えば: SN II: 235,27 *iādiso tāta bhavāhi yādiso Śāriputta-Moggalānā ti* // 「君よ, Śāriputta と Moggalāna とのように [君は] なれ, と」。

²⁵⁾ KN 69,3 = *bhavasva* = WT 67,9 = Gilg B: 208,7 = Cambridge 22a3 = Kolkata 32a1 = 東大蔵19b3。大英図書館蔵 31a1 *bhavaś[c](v)a* は *bhavasva* を意図したものであろう。

²⁶⁾ KN 271,7 *bhavasva* = WT 232,9 = Kolkata 122a3 = 東大蔵70a。Gilg B: 249,15 は写本に欠落があり, 人称語尾部分 (... [s]va) のみ残る。これも *bhavasva* を意図したものであろう。大英図書館蔵 108b4 *alpotsukas tvam bhagavan bhagavaṃś ca* は直前の *bhagavan* 「世尊よ」に影響されて (おそらくは **bhavasva* の) 語形を誤ったものと思しい。Cambridge 88a2 *alpotsukas tvam bhagavaṃś ca* は, 大英図書館蔵本の如き状況からさらに *bhagavan* を書き落とした状況と評価できる。

²⁷⁾ *tvaya* を単数主格と理解することについては TODA の Introduction xxxix を参照。*bhohi* は, Saddhp では他に例を見ないが, Mahāvastu には複数例を確認できる (→ 6.)。また Saddhp でも *bhoti* (62例; 加えて *bhotti* が5例)・*bhonti* (34例; 加えて *bhonti* が2例) であれば韻文に多数用例がある。これに対して **bhote*, **bhonte* の語形が見られないことは注意に値しよう。

ただしカシュガル写本散文部分に *bhavasva* の例が1例存することに留意を要する。KN IV:107,3 *yādṛṣo me putra aurasas tādṛśas tvam mamādyāgreṇa bhavasi* // 「私の実の息子のような、私にとってそのような者と君は今日以後、なる (= WT 100,18f.)」の並行箇所である: Kashg 110a1 *yādṛśau me putra orasas tādṛśānām mamādyā[va]-d-agreṇa bhavasva* ・「...[君は] 今日以後、私の [息子と] なれ」。これは「長者窮子」喩の一節で、長者が身をやつして窮子に語りかけ、義理の親子の関係を取り結ぶ箇所である。この場合は主語 (長者) の特別な関心・関与を中動態で表示した可能性があるかもしれない。

4.4. *bhavadhvam* と中央アジア所伝 *bhavata* / *bhavatha*

2人称複数命令法・中動態 *bhavadhvam* の用例は韻文中に2例、散文中に2例ある。WT 本索引に見る限り、対応する能動態命令法の正規形 *bhavata* の用例は存しない。韻文中に中期インド語的な *bhavatha* が3例見られるばかりである (→ 4.)。他方、中央アジア所伝の写本は韻文部分でも散文部分でも一貫して能動態の命令法を用いる。

table 7 KN/WT *bhavadhvam* とその異読

prose	KN 308,3 = WT 261,10 <i>bhavadhvam</i> ²⁸⁾	⇔ Kashg XV: 295b1 <i>bhavata</i>
prose	KN 308,3 = WT 261,10 <i>bhavadhvam</i> ²⁹⁾	⇔ Kashg XV: 295b1 <i>bhavata</i>
XIV 33a	KN 308,8 = WT 261,16 <i>bhavadhvam</i> ³⁰⁾	⇔ Kashg XV: 295b4 <i>bhavatha</i>
XIV 34b	KN 308,10 = WT 261,21 <i>bhavadhvam</i> ³¹⁾	(~ Kashg XV: 295b6 <i>bhūtvā</i>)

韻文中の例のうち Saddhp XIV 34b: *samāhitāḥ sarvi sthitā bhavadhvam* / 「[君たち] みな精神集中し、確固とした者となれ (KN 308,10 = WT 261,21)」の読みは Kashg XV: 295b6 *sarve samādhi (yaṃ sarvi sthitās ca bhūtvā ...)* との並行がとれない。原型は何れとも決しかねるが、しかしギルギット・ネパール写本群は一致してこの *bhavadhvam* を支持・示唆する。この際、両写本系統の祖形として *bhavadhvam* を想定するのは妥当である。

²⁸⁾ WT 261,10 *bhavadhvam* = KN 308,3 = Gilg A: 105,32 = 大英図書館蔵 121a4 = 東大蔵 78b2-3. Kolkata 137a6 *bha[ga]vadhvam* は誤記と思しい。Cambridge 99b5 *bhava tsu* は解釈困難。Kashg XV: 295b1 *bhavata* は能動態命令法。Farhād Bēg 33a7 *bha[ga]vata* は *bhavata* と理解できる。次注に見える Cambridge 99b5 *bha[ga]vata* を参照。

²⁹⁾ KN 308,3 *bhavadhvam* = WT 261,10 = Gilg A: 105,32 = 大英図書館蔵 121a4 = Kolkata 137a6 = 東大蔵 78b3. Cambridge 99b5 *bha[ga]vata* は *bhavata* と理解できる。能動態・命令法の語形はネパール所伝写本にかなり遅くまで残存していた可能性がある。中央アジア写本群は *bhavata* ないし *bhavatha* を支持する: Kashg XV: 295b1 *bhavata* および Farhād Bēg 33a7 *bhavata*; India Office Library XV: fol.175 Recto 3 (ya) *ttā bhavatha kulaputrā (sa)rve*。古形の残存については KN *āgamayadhvam* を巡る議論をも参照 (→ 4.4.1.)。

³⁰⁾ KN 308,8 *bhavadhvam* = WT 261,16 = Gilg A: 106,4 = Kolkata 137b1 = 東大蔵 78b4. Cambridge 100a1 ~ 大英図書館蔵 121a6 *bhavadhva(m)*。Kashg XV: 295b4 *bhavatha* (= Khādaliq Fragment 72 recto 3) は BHS 語形で、筆者はこれが最も原型に近いものとする。

³¹⁾ KN 308,10 *bhavadhvam* = WT 261,21 = Gilg A: 106,9 = Cambridge 100a2 = 大英図書館蔵 121b1 = Kolkata 137b2 = 東大蔵 78b4. Kashg XV: 295b6 *bhūtvā* は孤立する。

いま一例は: Saddhp XIV 33a *prayatā bhavadhvam kulaputra sarve* [WT sarva] 「良家の子息たちよ, [君たちは] みな自制した者となれ (KN 308,7 ~ WT 261,16)」。このカシュガル本並行は Kashg XV: 295b4-5 *pratiyattā bhavatha kulaputra sarve* であり, *bhavatha* と読む。この読みは中央アジア写本群において確実であるが³²⁾, 韻律的には不正規と言わざるを得ない。韻律を重視するなら *bhavadham* が本来的と言わねばならない。しかしこの場合, 敢えて韻律を崩してまで中央アジア伝承が *bhavatha* と読み変えた事情を考慮しなければならなくなる³³⁾。

散文中の例は: KN 308,3-4 *tena hi kula-putrāḥ sarva eva prayatā bhavadhvam susannaddhā dṛḍha-sthāmās ca bhavadhvam* 「だから (*tena hi*) 良家の子息たちよ, 他ならぬ [君たち] 皆は自制した (*prayata-*) 状態となれ (*bhavadhvam*)。しっかりと鎧って, 堅固な力 (*sthāma-*) を持ったものとなれ (= WT 261,9-10)」。この並行は: Kashg XV: 295b1 *tena hi kulaputrāḥ (sarve eva pratiyattā bhavata susannaddhā dṛḍhasthāmās ca bhavata)* である。

何れにせよ, Khādaliq・Falhād-Bēg・Kashgar の中央アジア所伝写本群は能動態の *bhavatha* ないし *bhavata* で一貫する。筆者としては, おそらく Mahāvastu にも証される *bhavatha* の語形 (→ 6.) がより真正・本来的なものとする。韻文部分での *bhavadhvam* については, 否定しがたい例もあるものの (Saddhp XIV 33aの例), カシュガル写本が伝える *bhavatha* が原形であり, 後に韻律を整える際に「校正」された可能性を指摘したい。

4.4.1. āgamayadhvam の問題

ギルギット・ネパール伝承が韻文でも散文でも一致して *bhavadhvam* を伝える理由は明確ではない。前後に存する中動態語形に影響されたと考えるのは一案であるが, しかし前後に見える同様の語形は KN 307,11 *āgamayadhvam* (= WT 260,22) のみである: *āgamayadhvam yūyam kulaputrā muhūrtam* 「君たちは, 良家の子息たちよ, しばし待て」。この *ā-gam* は使役法の中動態で「待つ」を意味する³⁴⁾。この読みは正しいように思われよう。しかし古写本には Gilg A: 105,24 *āgamayata*; Cambridge 99b3 *āgamayatha* とあり, ギルギット・ネパール共通祖形では **āgamayatha* を想定すべきであろう³⁵⁾。

³²⁾ Khādaliq Fragment 72 recto 3 ... [t]tā *bhavatha kulaputrā sarve* ...が直接支持する。Farhād Bēg 33b1 *pratiyatta bhavata kulaputra* ...はサンスクリット正規形に「校正」されたものと解せる。

³³⁾ ただし *bhavatha* の背景に中期インド語的な語形 *bhotha* が存したと考えた場合 (例えば Jā V: 150,26 *jhāneratā bhotha sadā samāhiṭā* 「[君たちは] 禪定に安らった者たちとなれ, 常に精神集中した者たちと」), überzählig Triṣṭbh と解せる。KN 28,9 *prayatā sucittā bhavathā kṛtāñjalī* 「自制し, よき思いをなし, 合掌礼をした者たちとなれ (I 99a)」のカシュガル写本並行箇所 (Kashg 35b3 *sadyās ca bhotha bhavatha kṛtāñjaliṅga*) にも *bhotha* が証される。

³⁴⁾ PW II: 676 さらに詳細は Sakamoto-Gotō, Fs. Deleu, p.280 を参照。同箇所挙げられるように, 無論, 中期インド語的な環境ではパーリ語 *āgāmeti* のように能動態の語尾をとる。原 Saddhp でも同様の状況であったものと思われる。Kashgar 写本など中央アジア写本群に証される *āgametha* と同じ語形がパーリ語にも証されるからである (例えば Jā II: 345,26 *āgametha tāva* 「ちょっと待て」; V: 460,3 *sattāhaṃ āgametha* 「七日間, 待て」)。

³⁵⁾ 大英図書館蔵 121a2 *āgamayadhva(m)* ~ 東大蔵本 78b1 *āgamayadhvam* ~ Kolkata 137a2 *āsamayadhvam* とあり, 語義的に好ましい中動態語形に「校正」されたのは相当程度新しい時期であったものと思われる。

サンスクリット語 °aya° は中期インド語では °e° と変化する。中央アジア伝本は並行箇所
で Kashg XV: 295a1 *āgametha* = Farhād Bēg XIV: 33a3 = 旅順 A-13 Recto 4 と読む。すなわち三
系統の共通祖形は **āgametha* と想定できる。つまり *āgamayadhvam* が影響した可能性は無
視できる。総じていえば、そもそも原 *Saddhp* 段階において中動態は機能しておらず、2人
称複数中動態の語形の多くは二次的なものと考えられる³⁶⁾。

4.5. 希求法の諸語形

現行のテキストを見る限り、3人称単数・希求法には複数の語形が混在している。顕著な
例を示すなら以下の通り。

Saddhp III 39 (WT 76,26-77,1 = KN 82,12-13)

yathā hi puruṣasya bhaved āgāraṃ jīrṇaṃ mahantaṃ ca sudurbalaṃ ca /
viśīrṇa prāsādu tathā bhaveta stambhās ca mūleṣu bhaveyu pūtikā // 39 //

「例えば [ある] 男に家があるとしよう (*bhaved*)、老朽し、大きく、またすっかり弱く
なったのが。同様に露台は倒れているとしよう (*bhaveta*)。柱たちは根本のところ腐っ
ているとしよう」(～ Kashg 90a2-4 *yathā hi puruṣasya*^[3] *bhaved āgāraṃ mahanta jīrṇaṃ ca*
sudurbalaṃ ca · viśīrṇa prāsādagataṃ bhaveyu stambhās ca mūla^[4] *smi bhaveya pūtikā* ·)。

しかし出典箇所には明らかな傾向の差を見て取れる (→ **table 2**)。サンスクリットの標準
形は *bhaved* であり、これが最も数多く、普遍的にみられることは当然である。BHS で普通
に見られる3人称能動態 *bhavi*³⁷⁾ および *bhaveya/bhaveyā* が韻文部分にのみ現れることも不
思議はない。そもそも MIA 語形は韻文部分に現れやすい。他方、正規の造語法に一応は適
う中動態語形 *bhaveta* が散文部分に見えないことは注意を惹く。以下、用例箇所を列挙する。

³⁶⁾ 例えば本来は中動態で活用する動詞 *ram* 「安らう」について、正規の文法に適用 KN III: 39,7 = WT 74,23
abhiramadhvam に対して Kashg 86a3 *'bhiramatha* およびネパール系に属する Cambridge 25b4 *ramatha* は
中期インド語的な *tha* 語尾で, Gilg A: 32,33 *ramata* は正規のサンスクリットの語尾で能動態活用を示す。
動詞 *pā* 「飲む」は能動態にも中動態にも活用するが、中動態の KN XV: 322,5 = WT 274,13 *pibadhvam* に対
して Gilg A: 115,2 *pivata* は正規のサンスクリットの語尾で, Cambridge 106a1 *pivatha* が *tha* 語尾で能動態を
示すこと同前である (Kashg XVI: 311b3 は *piveyāt* と希求法で読む)。先の註33をも参照されたい。

³⁷⁾ ただし BHS の特色として3人称に限らないことがある。例えば: *Saddhp* I 16c *ahaṃ pi tasyo bhavi kṣipra*
lābhī 「私もまた、それを速やかに得る者でありたい (KN 11,2 = WT 8,24)」とその並行 Kashg 18a3 *ahaṃ pi*
tasyaiva bhaveya lābhī [kṣipraṃ] (加えて Edgerton BHS §29.7) を参照。3人称の例であれば: *Saddhp* II
15ab *naḍāna veṇūna ca [WT va] nityakālam acchridra-pūrṇo bhavi sarvalokaḥ* / 「葦たちや竹たちに、常時に
互って、全世界が破れ目なく満ちているとしよう (KN 32,7 ~ WT 31,3-4 ~ Kashg 39a7-39b1 *naḍāna veṇunā*
va nityakālam acchridra^[39b1] *pūrṇo bhavi sarvalokaḥ*)。BHS における希求法の活用表は、簡便には Edgerton
BHS §29.1 を参照。

table 8 KN/WT bhavetaとその異読

II 57a	KN 47,3 = WT 43,21 <i>bhaveta</i> ³⁸⁾	⇔ Kashg 54b5 <i>bhave(j)</i>
II 100b	KN 53,3 <i>bhaveya</i>	WT 51,7 <i>bhaveta</i> ~ Kashg 60a7 <i>bhaveta</i> ³⁹⁾
III 39c	KN 82,13 = WT 76,28 <i>bhaveta</i> ⁴⁰⁾	⇔ Kashg 90a3 <i>bhaveyu</i>
III 41b	KN 83,3 = WT 77,7 = Kashg 90a6 <i>bhaveta</i> ⁴¹⁾	
III 79a	KN 88,11 = WT 83,5 <i>bhaveta</i> ⁴²⁾	(~ Kashg 94a5 <i>viditvā</i>)
III 100a	KN 93,5 = WT 88,5 <i>bhaveta</i> ⁴³⁾	No Data
IV 3a	KN 111,1 = WT 103,13 = Kashg 114b3 <i>bhaveta</i> ⁴⁴⁾	
IV 13b	KN 112,7 = WT 105,3 <i>bhaveta</i> ⁴⁵⁾	~ Kashg 115b4 <i>bhavitvā</i>
VII 3b	KN 158,2 <i>bhaveta</i> ~ WT 142,14 <i>bhaveta</i> ⁴⁶⁾	⇔ Kashg 152a3 <i>bhaveyād</i>
VII 3c	KN 158,3 = WT 142,15 <i>bhaveta</i> ⁴⁷⁾	~ Kashg 152a3 (<i>bha</i>) <i>veya</i>
VII 4a	KN 158,3 = WT 142,16 = Kashg 152a4 <i>bhaveta</i> ⁴⁸⁾	
VII 92d	KN 195,8 = WT 172,20 = Kashg 187b3 <i>bhaveta</i> ⁴⁹⁾	
VII 93c	KN 195,10 = WT 172,23 <i>bhaveta</i> ⁵⁰⁾	~ Kashg 187b5 <i>bhaven</i> (m°)
VII 94c	KN 196,2 = WT 173,2 = Kashg 187b6 <i>bhaveta</i> ⁵¹⁾	

³⁸⁾ KN 47,3 *bhaveta* = WT 43,21 = Gilg B: 190,33 ~ Cambridge 15a6 *bhaveta* = 大英図書館蔵 20b5 = Kolkata 22b1 = 東大蔵 14a5。ネパール伝本は揃って *bhaveta* と読む。この理由は、以下に見る異読 (*bhavet*) を参照すれば、異例な語形 *bhaveta* を合理化する思案に求められるかもしれない。

³⁹⁾ WT 51,7 *bhaveta* = Kashg 60a7 = Gilg B: 195,25 = Cambridge 17a4 = 大英図書館蔵 23a2 = Kolkata 25a1-2 = 東大蔵 15b4。KN 53,3 *bhaveya* は孤立し、ネパール系統写本群に支持がなく、Kashgar 写本とさえ対立する。KNは独自の判断で *bhaveya* と読んだ可能性がある。

⁴⁰⁾ KN 82,13 *bhaveta* = WT 76,28 = Gilg A: 34,21 = Cambridge 26b5 ~ Kashg 90a3 *bhaveyu* ~ Khādaliq Fragment 14 verso 5 *bhaveya* ⇔ 大英図書館蔵 36a5 *bhavet* = Kolkata 39a5 = 東大蔵 23b4。以下ネパール系統写本群には *bhavet* の読みが多く出る。この「校正」の結果、音節数は不足して *Triṣṭubh* として成立しなくなる。韻律に反してまでも正しい読みと受け取られたものであろう。

⁴¹⁾ KN 83,3 *bhaveta* = WT 77,7 = Kashg 90a6 = Gilg A: 34,23 = Cambridge 26b5 = 大英図書館蔵 36a6 = Kolkata 39a6 ⇔ 東大蔵 23b5 *bhavet*。

⁴²⁾ KN 88,11 *bhaveta* = WT 83,5 = Gilg A: 38,34 = Gilg B: 215,19 ⇔ Cambridge 28b2 *bhavet* = 大英図書館蔵 38a5 = Kolkata 41b2 = 東大蔵 25a1。

⁴³⁾ KN 93,5 *bhaveta* = WT 88,5 = Gilg B: 218,33 = Cambridge 29b4 = 大英図書館蔵 39b5 = Kolkata 43a5 ⇔ 東大蔵 25b8 *bhavet*。

⁴⁴⁾ KN 111,1 *bhaveta* = WT 103,13 = Gilg A: 47,28 = Gilg B: 230,10 = Kashg 114b3 ⇔ 大英図書館蔵 47a4 *bhavet* = Kolkata 51a5 = 東大蔵 30b5。

⁴⁵⁾ KN 112,7 *bhaveta* = WT 105,3 = Gilg A: 48,36 = Gilg B: 231,19 (~ Kashg 115b4 *bhavitvā*) ⇔ Cambridge 35b5 *bhavet* = 大英図書館蔵 47b4 = Kolkata 52a6 = 東大蔵 31a2。

⁴⁶⁾ WT 142,14 *bhaveta* ~ KN 158,2 *bhaveta* = Gilg A: 75,5 = Cambridge 50a2 = 大英図書館蔵 63a4 = Kolkata 70b2 = 東大蔵 41a2 ⇔ Kashg 152a3 *bhaveyād*。

⁴⁷⁾ KN 158,3 *bhaveta* = WT 142,15 = Gilg A: 75,6 = Cambridge 50a2 = 大英図書館蔵 63b4 = Kolkata 70b2 = 東大蔵 41a2。

⁴⁸⁾ KN 158,3 *bhaveta* = WT 142,16 = Gilg A: 75,7 = Kashg 152a4 = 大英図書館蔵 63b4 = Kolkata 70b2 = 東大蔵 41a2 ~ Cambridge 50a2 *caveta* (sic.)。

⁴⁹⁾ KN 195,8 *bhaveta* = WT 172,20 = Gilg A: 96,17 = Kashg 187b3 (~ Khādaliq Fragment 49 recto 6 [*bh*] *aveya*) ⇔ Cambridge 64a2 *bhavet* = 大英図書館蔵 79b6 = Kolkata 88b1 = 東大蔵 51a3。

⁵⁰⁾ KN 195,10 *bhaveta* = WT 172,23 = Gilg A: 96,20 = Cambridge 64a3 = Kolkata 88b2 = 東大蔵 51a3 ⇔ 大英図書館蔵 79b6 *bhavet* ~ Kashg 187b5 *bhaven* (m°)。Khādaliq Fragment 49 verso 1は *bhave[n]* とある。

⁵¹⁾ KN 196,2 *bhaveta* = WT 173,2 = Gilg A: 96,24 = Kashg 187b6 = 大英図書館蔵 80a1 = Kolkata 88b3 ⇔ Cambridge 64a3 = 東大蔵 51a4。

VIII 37d	KN 212,12 = WT 187,6 = Kashg 202a7 <i>bhaveta</i> ⁵²⁾	
VIII 38a	KN 212,13 = WT 187,7 <i>bhaveta</i> (= Kashg 202a7-b1 <i>bhave(ta)</i>) ⁵³⁾	
VIII 39c	KN 213,2 = WT 187,13 <i>bhaveta</i> ⁵⁴⁾	(~ Kashg 202b3 <i>caveta</i> (sic.))
X 7a	KN 229,1 = WT 199,12 = Kashg 217b2 <i>bhaveta</i> ⁵⁵⁾	
XIII 23b	KN 282,3 = WT 240,13 = Kashg XIV: 268b6 <i>bhaveta</i> ⁵⁶⁾	
XVIII 8a	KN 352,1 = WT 297,12 = Kashg XVIII: 339b1 <i>bhaveta</i> ⁵⁷⁾	
XVIII 70b	KN 373,7 = WT 316,18 <i>bhaveta</i> ⁵⁸⁾	~ Kashg XXV: 359b4 <i>bho[n]ti</i>
XX 14d	KN 394,6 = WT 333,20 <i>bhaveta</i> ⁵⁹⁾	~ Kashg XXI: 380a76 <i>bhaveya</i>

現行の校訂本によれば、散文部分における希求法語形は一貫して *bhavet* である。カシュガル写本もこれに準じる。しかし管見の限り1例とはいえ、カシュガル写本の散文に *bhaveya* が証されるのは注意に値する: Kashg XVII: 321a4-6 *yena cājita kulaputreṇa* ¹⁵⁾ *vā kuladuhitāya vā imaṃ tathāgatāyuspramāṇanirdeśaṃ dharmaparyāyaṃ śru-¹⁶⁾ *taṃ śrutvā caikacittotpādenāpy adhimuktir utpādita bhaveya* ... 「そして Ajita よ、もし良家の子息によって、あるいは良家の子女によってこの如来寿量の教示なる法門が聞かれたのなら—そして聞いてのち、一つの発心によって信解が発したこととなるのなら (*bhaveya*) ... (~ KN XVI: 333,2-3 = WT 284,10-13)」。*

さらに中央アジア断片に例を求めれば: Petrovsky Collection Frag. II 40b1 (*a*)*sti ca me bho puruṣa jīrṇā śani. saci taṃ kāryyaṃ bhaveyā āga*(... *a*)*haṃ te dāsyāmīti* 「そして私には、君、下男よ、古い麻布 (? *śani*) がある。もしそれが入り用となるのなら (*bhaveyā*) ... 私は君に与えよう、と」。この箇所のカシュガル写本対応は以下の如く *bhavet* と読む: Kashg IV: 109a7-b1 *asti ca me bho · puruṣa jīrṇaṃ śānavastram · sace(t) tvayā tena kā-^{1b1)} *ryaṃ bhaved āgacchāhaṃ te dāsyāma* 「そして私には、君、下男よ、古い麻の (*śāna-*, cf. Skt. *śāna-*, Pāli *sāṇa-*) 着物がある。もし君にそれが入り用となるのなら (*bhavet*)、来い。私は君にそれを与えよう」。つまり散文中に*

⁵²⁾ KN 212,12 *bhaveta* = WT 187,6 = Kashg 202a7 = 大英図書館蔵 85b6-a1 = Kolkata 95b3 = 東大蔵 55a3 ⇔ Cambridge 69b1 *bhavet*。

⁵³⁾ KN 212,13 *bhaveta* = WT 187,7 = Cambridge 69b1 = 大英図書館蔵 86a1 = Kolkata 95b3 = 東大蔵 53a3 (= Kashg 202a7-b1 *bhave(ta)*)。中央アジア伝本のうち India Office Library 所蔵 VII: fol.176 Verso 2 /// *nta bhaveta bāla u* の残欠に見られる *bhaveta* はこれに当たる。

⁵⁴⁾ KN 213,2 *bhaveta* = WT 187,13 = 大英図書館蔵 86a1-2 = Kolkata 95b5 = 東大蔵 55a4 ~ Kashg 202b3 *caveta* ⇔ Cambridge 69b2 *bhavet*。

⁵⁵⁾ KN 229,1 *bhaveta* = WT 199,12 = Cambridge 74a3 = Kashg 217b2 ⇔ 大英図書館蔵 91b6 *bhavanti*(i) ~ Kolkata 102b2 *bhavanti* = 東大蔵 59a1。

⁵⁶⁾ KN 282,3 *bhaveta* = WT 240,13 = Cambridge 91a1 = Kolkata 125b5 = Kashg XIV: 268b6 ⇔ 大英図書館蔵 111b3 *bhavet* = 東大蔵 72a5。

⁵⁷⁾ KN 352,1 *bhaveta* = WT 297,12 = Gilg A: 131,26 = 大英図書館蔵 126b3 = Kolkata 157a7 = 東大蔵 89a8 = Kashg XVIII: 339b1 ⇔ Cambridge 115a5 *bhavet*。

⁵⁸⁾ KN 373,3 *bhaveta* = WT 316,18 = Cambridge 122a2 = 大英図書館蔵 134b3 = Kolkata 166b3 = 東大蔵 94a3。

⁵⁹⁾ KN 394,4 *bhaveta* = WT 333,20 = Gilg A: 155,19 = Gilg B: 282,31 = 大英図書館蔵 142b2 = Kolkata 176a5 = 東大蔵 99a3 ~ Kashg XXI: 380a7 *bhaveya* ⇔ Cambridge 128b2 *bhavet*。

bhavet と読む箇所も、元をたどれば *bhaveya* ないし *bhaveyā* であった可能性がある⁶⁰⁾。

おそらく、これら特徴的な中動態語形 *bhaveta* の祖形は本来、多くは BHS では普通の語形 **bhaveya* であり、韻律を崩さずにサンスクリット文法に適うよう、音節構造が一致する最も合理的な語形として選ばれたのが *bhaveta* であったものであろう⁶¹⁾。それ故この語形は韻文部分にのみ現れる。また一部の箇所で伝本間の読みが揃わないことは、この「校正」がなされた時期を推定するのに示唆するところがある: Saddhp XX 14cd *dhāreyu sūtraṃ mama nirvṛtasya na teṣa bodhīya* [WT *bodhāya*] ***bhaveta*** *saṃśayaḥ* // 14 // 「[菩薩たちは] 涅槃した私の法を保持するであろう。彼らの菩提にかけては、疑惑は生じないであろう (KN 394,6 ~ WT 333,19-20)」。KN / WT 本が *bhaveta* と読む、このカシュガル写本並行箇所は *bhaveya* と読む: Kashg XXI: 380a6-7 *dhāraye sūtra(m) mama nirvṛtasya na te^{l7)}ṣa bodhāya* ***bhaveya*** *saṃśayam*)。梵文『法華経』原形段階、ないし三写本系統に分岐する以前の共通祖型段階で *bhaveta* を志向する加工が始まった可能性はあるが、しかしその方針は上例に見るように貫徹したとはいえない。この件、*bhavate* を巡る状況を参照されたい (→ 4.1. および 4.1.1.)。

この *bhaveta* の語形は、韻律を規定通りに合わせるための詩人のライセンスとしてしか機能していない。*bhū* の中動態の活用形が極めて乏しくパラダイムを形成しないこと、散文に例を見ないことはその傍証といえよう。

4.5.1. 中央アジア所伝断片に見られる *bhaveta* の用例

さらに参考のため Saddhp XIV 53ab の並行関係を観察する: *kathaṃ nu śraddheyaṃ idaṃ bhaveyā parinirvṛte lokavināyakasmin* / 「一体どうしてここに信じる [心] が起きましようか (*bhaveyā*)、世界の指導者が完全に涅槃した後には (KN 314,1 = WT 267,3-4 ~ Gilg A: 110,10-11)」。これを Farhād Bēg 37a3 は *kathaṃ nu śraddheyaṃ ida(m) bhaveta* *par(i)n(ir)vṛte lokavināyakesmī(m)* と、Kashg XV: 302a3-4 は *kathan nu śraddheyaṃ (idaṃ bhave)ta parinirvṛte lokavinā^{-l4)}yakebhi* ・ と読む。この並行箇所においては、ギルギット・ネパール伝本の *bhaveyā* に対して中央アジア伝本は *bhaveta* と読む。これは先の Saddhp XX 14cd における関係とちょうど逆転している。

このように対応が相互に矛盾する以上、共通祖型段階で **bhaveya* → *bhaveta* の「校訂」が貫徹したとは想定し得ない。そのようなテキスト校訂作業は各伝本に分岐した後に緩やかに進展していったものと思しく、KN / WT 校訂本の段階に至ってなお貫徹しなかったものようである⁶²⁾。

⁶⁰⁾ 当箇所の並行を刊本に見れば以下の通り: KN IV: 106,11-12 = WT 100,8-10 *asti me bhoḥ puruṣa jīrṇaśāṭī / sacet tayā te kāryaṃ syād yācer ahaṃ te 'nupradāsyāmi* / 「私には、君、下男よ、古布が (*jīrṇaśāṭī*) ある。もしもそれが君に入り用のものであれば (*syān*)、君が求めるなら、私は君に与えよう」。

⁶¹⁾ *bhaveyur* (3 pl. opt. act.) が韻文中にも散文中にも現れる一方、*bhaveran* (3 pl. opt. mid.) は存在しない。このことは示唆的といえる。

⁶²⁾ 本来的な語形 (と想定される) 中期インド語的語形 (*ācakṣati*, *ācakṣeya* etc.) からより古典期文法に近い・適う形 (第I類動詞の能動態・希求法 *ācakṣet* から中動態の *ācakṣeta* さらに正規の第II類動詞の中動態語形 *ācakṣita*) へと写本伝承のなかで改変されていく例については笠松 (2019b) を参照されたい。

5. 小結

結論的には、梵文『法華経』は本来はほぼ全面的に能動態活用を採る時代に撰述された文献であった。*bhū* も能動態の活用を採っていたものと思しい。おそらくこの時期には韻律上の規制はやや緩かったものであろう。しかし後にテキストをサンスクリット化し、Indravajrā や Upendravajrā といった古典期韻律に合わせようとする傾向が強くなり、その必要に合わせて語形の加工・「校訂」がなされるに至ったものと考えられる。この事情を別言するなら、中期インド語形を韻律に無理なくサンスクリット化するために選ばれた語形が中動態語形と一致したに過ぎないものである(→ 4.5.)。そのため中動態の活用語形はそもそも少ない。

bhū の中動態は、非生産的であったというに留まらず、本来機能していなかったと言わなければならない。韻文で中動態語形が伝わるにも関わらず、その散文対応箇所でも能動態を用いた例を想起されたい(→ 4.1.1.)。すなわち中動態語形の相当数は——少なくとも本稿の扱う *bhū* のそれは——、韻律上の要請や後代の写生字の手になるもので、特段の意味を持った可能性は低い。梵文『法華経』原形の形成時に、能動態と中動態の対立を意識して著述がなされていたとは考えがたい。

中動態語形への「校訂」の時期は、部分的には共通祖型段階に遡るかもしれない。例えば *bhaveta* の読みが各伝承でしばしば読みが揃うことはこの可能性を示唆する。しかし読みを違える箇所も多い。「校訂」は後代の写本伝承のなかで順次なされたものであった蓋然性が高い(→ 4.1.1. また *ā-gamayadhvam* を巡る状況→ 4.4.1.)。この写本校訂作業はさらに進み、不自然な語形 *bhaveta* を避けて *bhavet* と読む写本も現れるに至ったものと思われる(→ n.38 以下)。

もちろん原型形成時の学匠たちが中動態の価値を意識したと考えることは可能である。あるいは後に展開した伝統のなかで、学匠たちが中動態語形に特段の意味を担わせようと語形を改変した可能性は否定できない(→ 4.4.1.)。しかしそうした思案は散文部分のテキストに影響をほぼ残していない。散文部分に現れる中動態語形は、わずかに2人称命令法・単数の *bhavasva* (1例) 及び *bhavadhvam* (2例) に限られる(→ 4.3. 及び 4.4.)。何らかの意義を持たせるなら、韻律の制約のない散文部分でこそ容易であったはずである。伝承される中動態語形に特別な意味合いを追求する可能性は限定的であるというほかない。

無論のこと、将来行われるべきテキスト校訂に際しては写本に立証される読みを採るべきである。しかしこの際、写本に証される読み(の一部)に二次的・三次的な解釈による新語形や人工的な語形があり得ることに注意を要する。そこで本稿の如く、並行箇所の読みに注目して文法的な推移を観察して二次的な語形か否かの考察を行い、もって将来の批判的校訂に資する論考の集積がなされねばならない。

6. Mahāvastu の状況

『大事 (Mahāvastu)』は諸部派のひとつ説出世部所伝の、仏伝を伝える大部の經典である。ここでも *bhū* は能動態で活用する。

3人称単数・複数 *bhavati*・*bhavanti* の用例はそれぞれ約370~380余例が存する。これに比して3人称単数・中動態 *bhavate* は9例のみであり、用例箇所はすべて韻文部分に限られる。例えば: Mv II: 80,12^m *yo jāyate so **bhavate** suśīlo* 「[我が家門に] 生れる者であれば、その者はよき生活習慣を備えた者となる (= Ed. MARCINIAC 111,2)」。これは 4.1. 節で見たように break の2つの短と cadence 冒頭の1つの長とを担う。3人称複数・能動態の *bhavante* の例は見られない。能動態の *bhavati*・*bhavanti* の膨大な用例数を思えば、このあまりの不均衡は異とするほかない (→ 4.)。

3人称単数希求法の語形としては複数の語形が伝わる。BHS 的な *bhavi* は韻文中に2例、*bhaveya* は49例 (うち韻文12例・散文37例)、*bhaveyā* は48例 (うち韻文7例・散文41例)、正規のサンスクリット語形 *bhavet* は35例 (うち韻文27例・散文8例) である。BHS *bhaveya* および *bhaveyā* が韻文にも散文にも広く用いられる一方で、3人称単数・中動態 *bhaveta* は例を見ない。

命令法については *bhohi* が韻文にのみ9例、*bhavāhi* が8例 (うち韻文5例・散文3例) 存する。*bhohi* の例は: Mv II 236,16^m *tvam ca bhadre sukḥi **bhohi** muñcāmi* [Ed. MARCINIAC *muñcāmi*] *te mahāmygam* // 「そして君は、幸ある女よ、安心せよ。[私は] 君のために解き放とう、大鹿を (~ Ed. MARCINIAC 294,19)»; Mv II: 404,6^m ***bhohi** prṭīmanaso* [Ed. MARCINIAC *prṭīmanaso*] *bhujagendra* 「心喜んだ者 (*prṭīmanasa*-) となれ、蛇の王よ (~ Ed. MARCINIAC 483,19)」。 *bhavāhi* であれば: Mv II: 12,7^m *hṛṣṭo **bhavāhi** naravara yasya tāva kulasmim pratyutpanno* 「まずはその家門に [菩薩が] 生れた、[君は] 歡喜した者となれ、人中の優秀者よ (~ Ed. MARCINIAC 17,8)»; Mv III: 172,14-15^p *ahaṃ kumāra rājā tāva āṇapemi tvam* ^[15] *rājā **bhavāhi**. ahaṃ ca ṛsipravrajyāmi* [Ed. MARCINIAC *ṛṣi°*] *pravrajīṣyāmi* 「私は、王子よ、王としてまずは命じる。君は王となれ。そして私は聖仙として出家しよう (~ Ed. MARCINIAC 221,11f.)」。中動態 *bhavasva* の例は見られない。

2人称複数であれば *bhavatha* で一貫するようである。例えば: Mv III: 78,15^m *yathāryaputrā* [Ed. MARCINIAC *°tra*] *capalaṃ bhavathā nāthā anāthanām* 「良家の息子たちよ、急ぎ [君たちは] 主人なき者たちの主人となるように (~ Ed. MARCINIAC 90,10)»; Mv III: 433,1^p *yāyam apīmena puṇyena* [Ed. MARCINIAC *api dāni Puṣyena*] *saṃgṛhītā **bhavatha*** 「君たちもこの福德を摂受した者たちとなれ (~ Ed. MARCINIAC 558,11f.)」。サンスクリット正規形 *bhavata* の例のみならず、中動態 *bhavadhvam* の例も見られない。

7. 維摩経における用例

初期大乘經典のひとつ、『維摩経（維摩詰所問経: Vimala-Kīrti-Nirdeśa）』には梵本が伝わる。同書の散文部分には *bhū* の3人称単数・希求法の能動態語形と中動態語形とが相前後して現れる箇所がある: VKN III: 23,22-24,2 *ye ca bhadantāya piṇḍapātaṃ dadati te teṣāṃ nālpaphalaṃ na mahāpaphalaṃ bhavet ... buddhagatisamavasaraṇāya ca bhaveta na śrāvakaḡatisamavasaraṇāya* 「大徳に食事を与える者たちがあれば、彼等に少ない果報は [生じず], 大きな果報は生じないであろう (*bhavet*)。...[施食は] ブツダの境涯へ入るためになることだろう (*bhaveta*) [、しかし] 声聞の境涯へ入るためには、ない」。

管見の限り、VKN における *bhū* の中動態語形はこの *bhaveta* 一例のみである。また、このほか BHS 文献に稀に *bhaveta* が見られることがある。『法華経』のような文献の韻文部分に使用されたからには、その用例を知る後代の写字生が *bhaveta* を古語・雅語として用いることもあり得たかもしれない。しかしそこには中動態の機能は見出しがたいように思われる。

(2022年度・科研費・基盤 C 「梵文『法華経』形成史および伝承史解明のための文法学的研究」(課題番号20K00067) による成果)

略字解

BHS	Buddhist Hybrid Sanskrit	MuṇḍUp	Muṇḍaka-Upaniṣad
ChUp	Chāndogya-Upaniṣad	P	散文部分
Gilg	Gilgit	RV	Ṛg-Veda
Jā	Jātaka	ŚvetUp	Śvetāśvatara-Upaniṣad
Kashg	Kashgar	Saddhp	Saddharma-puṇḍarīka-sūtra
Kaṭhop	Kaṭha-Upaniṣad	Skt.	Sanskrit
KN	『法華経』Kern-Nanjio 校訂本	SN	Saṃyutta-Nikāya
^m	韻文部分	VKN	Vimala-Kīrti-Nirdeśa (梵文『維摩経』)
m.c.	metri causa	WT	『法華経』Wogihara-Tsuchida 校訂本
MIA	Middle Indo-Aryan		

参考文献

- Aufrecht, Theodor (1877), *Die Hymnen des Rigveda*. 2 Bde. 2. Auflage. Bonn: Adolph Marcus.
- Chandra, Lokesh (1977), *Saddharma-Puṇḍarīka-Sūtra. Kashgar Manuscript*. Tokyo: The Reiyukai.
- Edgerton, Franklin (1946), ‘Meter, Phonology, and Orthography in Buddhist Hybrid Sanskrit’, in: *Journal of the American Oriental Society* 66, pp.197-206.
- (1953), *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, 2 vols. New Haven: Yale University Press.
- Fausbøll, V. (1877-1896), *The Jātaka. Together with its commentary being tales of the anterior births of Gotama Buddha*. 7 vols. London: Pali Text Society.
- Feer, Leon (1884 [rep. with corrections 2006]), *Samyutta-Nikāya. Part I*. Lancaster: The Pali Text Society.
- (1881-1898 [rep. 2000, 2001, 2001, 2008]), *Samyutta-Nikāya. Part II-V*. Oxford: The Pali Text Society.
- Geiger, Wilhelm/Batakriṣṇa Ghosh/Norman, K.R. (1994), *A Pāli Grammar*. Oxford: The Pali Text Society.
- Gotō, Toshifumi (1987), *Die “I. Präsensklasse” im Vedischen. Untersuchung der vollstufigen thematischen Wurzelpräsentia*. Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften.
- (2000), ‘Zur Sprache der Śvetāśvatara-Upaniṣad’, in: *Vividharatnakaraṇḍaka. Festgabe für Adelheid Mette. Indica et Tibetica* 37, Swisttal-Odendorf, pp.259-281.
- 後藤 敏文 (2017), 「Śvetāśvatara-Upaniṣad の原語について」『国際仏教学大学院大学研究紀要』21, pp.332-287.
- Hinüber, Oskar von (2001), *Das ältere Mittelindisch im Überblick. 2., erweiterte Auflage*. Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften.
- 平岡 聡 (2010), 『ブツダの大いなる物語 上』, 東京: 大蔵出版.
- (2010), 『ブツダの大いなる物語 下』, 東京: 大蔵出版.
- 石田 智宏 (2021) 「〈書評〉Kaie Mochizuki and Byungkon Kim (eds.), *Bibliography of the Studies on the Saddharmapuṇḍarikasūtra (1844-2020)*, *Lotus Sutra Studies I*」『日蓮学』5, pp.75-80.
- 伊藤 瑞叡 et al. (1993), 『梵文法華経荻原・土田本総索引』, 東京: 勉誠社.
- (2007), 『法華経成立論史—法華経成立の基礎的研究—』, 京都: 平楽寺書店.
- Kaie Mochizuki/Byungkon Kim/Yumi Katayama, eds. (2020) *Bibliography of the Lotus Sutra (1844-2020) (Bibliography of the Studies the Studies on the Saddharmapuṇḍarikasūtra (1844-2020), Lotus Sutra Studies I*. International Institute for Nichiren Buddhism of Minobusan University.
- 笠松 直 (2019a), 「梵文『法華経』「提婆達多品」の言語的特徴瞥見」『南アジア古典学』14, pp.125-145.
- (2019b), 「梵文『法華経』諸伝本における *ā-khya* と *ā-cakṣ* の活用の変遷について」『印度学佛教学研究』67(2), pp.958-952.
- (2021), 「KN 322,4 mā ... *śociṣṭa*」『南アジア古典学』16, pp.139-150.
- Kasamatsu, Sunao (2022), ‘*mā bhaiṣṭa / bhāyatha*’, in: 『印度学佛教学研究』70(3), pp. 1095-1101.
- Kern, H./Bunyu Nanjio (1908-1912), *Saddharmapuṇḍarīka. Bibliotheca Buddhica X*. St Petersburg (Rep. Delhi: Motilal Banarsidass 1992).
- Kotsuki, Haruaki (2003), *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from University of Tokyo General Library (No. 414). Romanized Text*. Tokyo: Soka Gakkai.
- (2010), *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from Cambridge University Library (Add. 1684). Romanized Text*. Tokyo: Soka Gakkai.
- (2014), *Sanskrit Lotus Sutra manuscript from the Asiatic Society, Kolkata (No. 4079) Romanized Text*. Tokyo: Soka Gakkai.
- Limaye, V.P./Vadekar, R.D. Ed. (1958), *Gandhi Memorial Edition. Eighteen Principal Upaniṣads. (Aṣṭādaśa-Upaniṣadaḥ). Vol. I*. Poona: Vaidika Saṁśodhana Maṇḍala.
- Marciniak, Katarzyna (2019), *The Mahāvastu. A New Edition. Vol. III*. Bibliotheca Philologica et

- Philosophica Buddhica XIV, 1. The International Research Institute for Advanced Buddhology. Tokyo: Soka University.
- (2020), *The Mahāvastu. A New Edition. Vol. II.* Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica XIV, 2. The International Research Institute for Advanced Buddhology. Tokyo: Soka University.
- 水野 弘元/中村 元/平川 彰/玉城 康四郎 編 (1977), 『仏典解題事典』 第二版, 東京: 春秋社.
- Mizufune, Noriyoshi (2011), *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from the British Library (Or. 2204). Romanized Text.* Tokyo: Soka Gakkai.
- Sakamoto-Gotō, Junko (1993), *Zu mittelindischen Verben aus medialen Kausativa. Jain Studies in Honour of Jozef Deleu.* Tokyo: Hon-No-Tomoshia, pp.262-314.
- Senart, Émile (1977 [rep. 1882, 1890, 1897]), *Le Mahāvastu. Texte sanscrit publié la première fois et accompagné d'introductions et d'un commentaire.* 3 vols. Tokyo: Meicho-Fukyū-Kai.
- 大正大学総合佛教研究所 梵語仏典研究会 (2006), 『梵文維摩経—ボタラ宮所蔵写本に基づく校訂—』, 東京: 大正大学出版会.
- 高橋 尚夫/西野 翠 (2011), 『梵文和訳 維摩経』, 東京: 春秋社.
- Toda, Hirofumi (1981), *Saddharmapuṇḍarīkasūtra. Central Asian Manuscripts Romanized Text.* Tokushima: Kyoiku Shuppan Center.
- 辻 直四郎 (1970), 「法華経の言語」 『法華経の成立と展開』, 京都: 平楽寺書店, pp.3-21.
- Watanabe, Shoko (1975), *Saddharmapuṇḍarīka Manuscripts Found in Gilgit. Part two: Romanized Text.* Tokyo: The Reiyukai.
- Wille, Klaus (2000), *Fragments of Manuscripts of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra from Khādaliq.* Tokyo: Soka Gakkai.
- Wogihara, U./Tsuchida, C. (1934), “*Saddharmapuṇḍarīka-Sūtram. Romanized and Revised Text of the Bibliotheca Buddhica Publication by Consulting a Skt. MS. & Tibetan and Chinese Translations*” Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store.
- Zhongxin, Jiang (1997), 『旅順博物館所蔵梵文法華経断簡 写真版及びローマ字版』, 東京: 旅順博物館・創価学会.

Middle Forms of *bhū* in the *Saddharmapuṇḍarīka-sūtra*

Sunao KASAMATSU

National Institute of Technology, Sendai College

Abstract

The verb *bhū* is conjugated in the active voice as 3 sg. ind. *bhavati*, 3 sg. opt. *bhavet* etc. with few exceptions since the RV. However, in the metrical portion of the *Saddharmapuṇḍarīka-sūtra*, there are several middle forms such as 3 sg. opt. *bhaveta*, 3 sg. ind. *bhavate*, which occurs rarely in the *Mahāvastu*, its contemporary. Why and how were these unusual middle forms used?

This paper concludes that the unusual mid. opt. *bhaveta*, prosodically preferable to act. *bhavet*, is produced by poetic license as a sanskritized form of BHS *bhaveya*. BHS *bhaveya* sporadically occurs in the prose portion of Central Asian manuscripts. This would be an original form. The original *bhaveya* in the verses seems to have been replaced by *bhaveta*

early on, and the readings are relatively uniform in many manuscripts. However, there is a tendency to revise *bhaveta* as *bhavet*, though prosodically undesirable, in some of the Nepalese manuscripts. The mid. opt. *bhaveta* would have been regarded as grammatically undesirable by the editors. The *bhavate* can also be interpreted as poetic license, as is the case in the verse Upaniṣads.

Imperatives, 2 sg. *bhavasva* and 2 pl. *bhavadhvam*, cannot go back to the original Saddhp. The original reading would be BHS *bhavetha* or Skt. *bhavata* attested in Central Asian manuscripts.

Middle forms of *bhū* are rarely attested and predominantly found in metrical texts. The same would be true of the Proto-Saddhp, where the verb *bhū* would have been conjugated in the active. The middle forms, albeit used, would have lost semantic functions.